

第 38 号

発行所
茨城県筑西市下山590
茨城県立下館第一高等学校
紫西同窓会
TEL (0296) 24-6344 (代)
編集兼発行責任者
野澤義男
印刷所 戸頃印刷所

紫西会報

同窓会長に就任して

新同窓会長 中山喜一郎
(三十二回卒)



符を打ってしまいました。

関根利康先生との出会いは、私が下館一高一年生の時、先生も教師一年生、それ以来五十五年の間、先生と教え子という感覚でなしに友達同士の様な、キイチヤン、利康さんと気軽に呼び合う親密な交際でした。

昭和六十二年四月第十八代の校長先生として下館一高に戻り、県高野連の会長として活躍されました。

そしてPTAの全国大会に、四国徳島、九州、金沢と共に参加したのがつい先日のごとく走馬灯の様に想い出されま

す。
関根先生にどんな事をお願いしても快く引き受けてくれ、本当に心温まる良い先生でした。

生者必滅会者定離と申せ、本当に残念でなりません。

心より御冥福をお祈り申し

上げます。

昨年暮れ下館一高紫西同窓会の本部役員会を開き、その時同窓会長が不在では何かと都合があり、次期会長選出の運びとなりまして、副会長数名居る中で私が最年長と言っただけの理由で会長候補に選出されました……

浅学非才の私などその器にあらずと何回も辞退したのですが、引受けざるを得なくなってしまうました。

紫西同窓会長を受けたからにはその職責を全うすべき努力する覚悟ですので何卒本部役員、学校関係者、そして同窓会員皆様様の絶大なる

御協力のもとなんとか相務めたいと思っております故、くれぐれもよろしくお願い申し上げます。

本年も全日制定時制合せて二九〇名の新同窓会員の入会者があり、創立以来二万数千名という多数の同窓生が国内外を問わず全世界で活躍の事と思われま

す。
そして第一回の卒業生は今年満百才を迎えるという事で現在何名の方が御健在で居るかわかりませんが、誠に喜ばしき事と思われま

す。
今後とも紫西同窓会員皆様の益々の御活躍と、健勝を祈念致しまして筆をおさ

平成二十年一月

昨年の六月下旬同窓会長関根利康氏夫人より電話があり、中山さん下館一高の七曜祭に主人は見に行くのを楽しみにしていたのですが、体調を拗らせ入院してしまい残念ですが行けなくなりました。その旨どうぞお伝え下さいとの事……

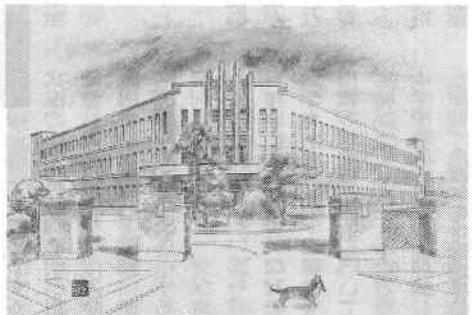
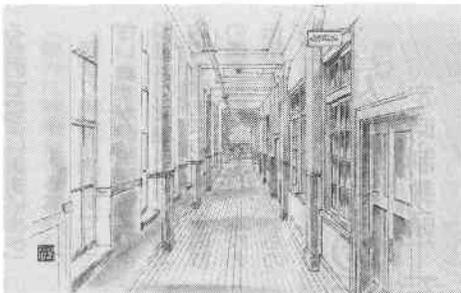
した。あまりお話はしないようにとの条件付で(熱が上がりつつから)。

先生のおまりの変わり様に

びっくりし、でも意識ははっきりしていました。蚊の鳴く様な小さな声で、キイチヤン——と何かを話し始めました

が、先生早く良くなつて退院して来て下さいと、話はその時ゆっくりに聞きますからと、その場を退いてきました。

それから四日後の六月二十八日午後六時十五分逝去され、七十八才の生涯に終



ごあいさつ 校長 竹井 茂雄



尽くしている次第でございます。何卒、ご指導・ご鞭撻を賜われまじよう幾重にもお願い申し上げます。

鶯花の節となりました。紫西同窓会員の皆様にはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

皆様には日頃から本校の教育活動に深いご理解と絶大なるご支援とを賜わりまして、誠にありがとうございます。衷心より御礼申し上げます。次第でございます。

土浦一高から東京学芸大を経て、本県の県立高校の教諭になりまして、昭和四十七年四月より、今年度が三六年度、現在、五九歳であります。その間、国語科教諭として、潮来高校、本校、筑波高校、土浦一高に勤めた後、人事担当の管理主事として、平成五年四月からの三年間は県の教育庁教職員第二課に、その後の二年間は高校教育課（平成八年四月に教職員第一課が「義務教育課」と、教職員第二課が「高校教育課」と改称された）に勤務し、教頭としての六年間を土浦湖北高校、下妻一高、土浦三高で過ごし、八千代高校での三年間の校長を経て現在に至っております。生徒と教職員とが丸ごと

て全てに頑張る、活気に溢れた本校が大好きな第二七代校長であります。個人の活動領域が社会生活のあらゆる面に亘って拡大しつつある今日、誰にも、主体性を確立し豊かな人間関係を築いていくことが求められております。学校教育においても、心豊かに主体的に創造的に生きられる資質や能力を確実に身に付け、社会生活においてそれらを最大限に活用して自己を取り巻く環境に柔軟に対応し、自らのなすべきことを積極的に遂行し生活を豊かにしていくことのできる人間の育成が望まれているのであります。本県の教育委員会が、全国に先駆けて今年度から県立高校の全ての第一学年の生徒の教育課程に「道徳」の授業を導入したのも、そのためなのであります。

いわゆる「ガリ勉」ではない、人間性豊かな「秀才」を世に送り出すことが、本校に課せられた使命であり、それはまた、生徒諸君自身の、保護者各位の、地域住民の皆さんの強い要望でもあると思量するのであります。自ら

の個性を發揮しながら自己の進路を考え、本校での生活を主体的に積極的に送ることで、将来の自己実現に向けて確実な基礎を築くことが出来るものと確信するのであります。

六月二八日と七月二日という日は、私には忘れられない日となりました。昨年六月二八日、長年に亘り会長として本会の発展にご尽力を賜わりました関根利康先生が亡くなられ、七月二日に告別式が執り行われたからであります。関根先生ご逝去との突然の報に接し、悲しみと驚きとを禁じ得ませんでした。「弔辞」でも申し上げましたが、今年度の入学式には元氣なお姿でお越しいただき、新入生に紫西同窓会長としての

祝意と激励とを頂戴したばかりでありましたので、先生の悲報を俄には信じられなかったのであります。個人的にも以前から種々ご指導を頂いておりましたし、人生の大先輩としてまだまだ多くをご教示いただけるものとはばかり思っております。ご遺族の胸中をお察し申し上げ、ご冥福を心からご祈念申し上げます。

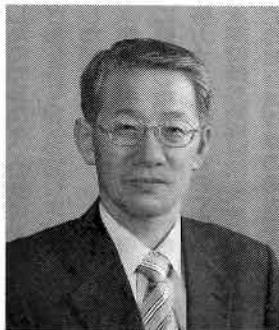
るものでございます。

元より浅学非才の身ではございませうが、生徒諸君の希望進路の実現に向けて、人的にも物的にも出来る限りの条件整備に専念し、本校の伝統をますます輝かしいもの

にすることを誓うと同時に、惜しみないご支援・ご協力を何卒、と伏してお願ひ申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。ご所存でございます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

定時制の近況報告

定時制教頭 石川 弘



「還暦を過ぎた私は女生徒町内会の話をもらう」
小野小町文芸賞 入選
一年生吉村園子さん(六十七歳の作品)

状況の中、定時制に学ぶ生徒俊も大幅に変わり、入行動機や、年齢、学習歴、生活実態はますます多様化する現況にあります。

定時制教育は、終戦後の混乱の中、向学心に燃えながら経済的に恵まれず、働ながら勉学を希望する勤労青年のために発足しました。しかし現在は、経済の飛躍的な発展に伴い産業構造が

本校定時制においても、青年期に家庭の事情などで進学をあきらめ、退職後や自営の仕事に一段落がついて定時制に入学してきた方や中学校時代に不登校を経験した生徒、全日制を中途退学し

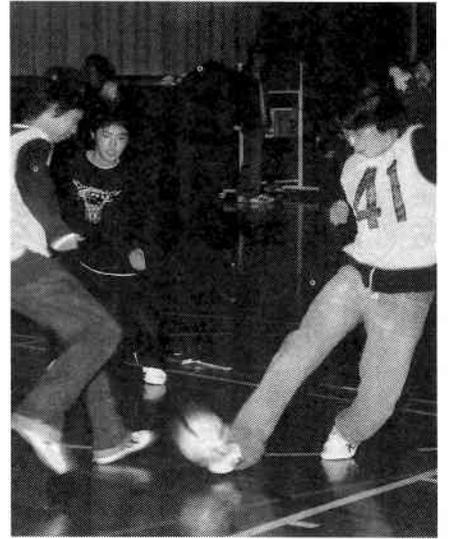
た生徒、外国籍の生徒など、ほとんどの生徒が、ある意味では人生の再出発をかけて本校に入学してきています。

ご承知のように、本校定時制は、県立高等学校再編整備後期計画の対象校となったことから、今年度の新入生を最後に、四年後にはこの伝統の尊を下ろすこととなります。

現在、標記の女学生のように還暦を越えた方四名を含み五十五名の生徒が在籍していますが、皆家族のように、日々勉強や部活動にと元気に仲良く学校生活を過ごしています。特に休み時間や放課後など、英語や数学に悩んでいる年配の方が若い生徒たちに教えを請うなど、親子以上に年の離れた学友との学びは、若い生徒たちにとっても貴重な体験であり、還暦を越えて、なお自らを高め続けている年配の方々の姿は、若い生徒たちにとって今後の人生におけるよき道しるべとなつていきます。

さて、今年度の生徒の活動状況ですが、まず文化面に ついて紹介します。

本校の伝統となつた「俳句・短歌」部門では、文芸



部が盛岡で開催された短歌甲子園全国大会において準優勝という輝かしい成果を収めたのをはじめ、同じ日に松山で開催され七年連続出場となつた俳句甲子園全国大会でも別の部員が個人賞を獲得するなど、今年もまた全国に下館一高の名を轟かせてくれました。

特に俳句甲子園では、これまでの文芸部の活動が高く評価され、顧問の為我井節教諭と三年生の坂入一生君がNHKから別々に「俳句王国」への出演依頼を受け、全国から選ばれた「高校生俳人」やその指導者達と感性溢れる句を披露し合いました。そこでの活躍はBS放送を通して全国に放映され、

下館一高文芸部のレベルの高さがあらためて全国に響き渡つたところです。その時の作品を紹介します。坂入君の作品

「脚本のやうに流星
死なざりき」

「熱帯魚より
熱帯魚らしく居る」

為我井教諭の作品
「ひとしきり校塔めぐる
秋つばめ」

夏帽子」

その他にも、全国学生俳句大会学校対抗の部での優勝をはじめ、東洋大学現代百人一首での秀逸入選や国民文化祭とくしま二〇〇七文芸祭短歌の部特選、茨城県芸術祭参加短歌大会大賞な

ど、数多くのコンクールに応募し、多数の生徒が入選・入賞しています。いずれの作品も仕事と学校との両立や日常の高校生活の様子を詠つたものであり、多くの生徒がこの「俳句・短歌」部門での入選・入賞をきっかけに、生きる自信を深め立ち直る転機となっています。

次にスポーツ面では、六月に行われた県定時制通信制体育大会において、陸上競技、ソフトテニス、バドミントン、柔道の四競技で八名の生徒が全国定時制通信制体育大会への出場権を獲得しました。

夏休みに行われた全国大会では入賞することはできませんでしたが、二年生の川又伸治君が走高跳で決勝に進出するという素晴らしい跳躍を披露し、来年の活躍に大きな期待が寄せられています。いずれの種目も仕事と学校の合間の限られた時間の中で練習でしたが、練習時間を工夫し目標に向かって一途に取り組み選手達の姿は、定時制で共に学ぶ仲間たちに共感と感動を与えています。

また、秋季大会では、サッカー、男女ソフトテニスの三種目で優勝し、柔道個人でも準優勝するなど、その勢い

はとどまることがなく、スポーツ部門においても下館一高定時制の活躍は県下轟いています。

今後は全日制との合同練習も視野に入れ、練習期間を延長するなどして、多くの生徒に全国大会出場の体験を味わわせたいと考えています。最後に、そんな定時制生徒の心を詠んだ作品を紹介して近況報告とします。

「しわくちやのみんなの笑顔に会えるから今日もぐるよ定時制の門」(同志社女子大学「SEITOU」百人一首)短歌コンクール入選 三年生須藤紘彬君二十歳の作品

関根紫西同窓会長逝く 任期半ばにして



併い、新会長に就任され、以来本校の発展にご尽力されてきた関根利康紫西同窓会長が、平成十九年六月二十八日(木)に、

平成十六年五月八日(土)の鈴木啓正同窓会長の御勇退にて急逝されました。氏はお祈りいたします。

弔辞

校長 竹井茂雄

下館一高に勤務する者を代表いたしましたして、関根利康先生の御霊に謹んでお別れの言葉を申し上げ、生前の教えに対し、改めて御礼申し上げます。

関根先生の悲報はあまりに突然で、ただただ果然と立ち尽くすばかりでございます。今、こうして先生のご霊前に立っております、信じることができません。

先生には、今春の入学式の折にもご来賓いただき、本校の同窓会長という立場から、新入生への祝意と激励とを賜りました。つい昨日のことのように思い出されます。先生には、本校の紫西同窓会の会長といたしまして、人生の大先輩といたしまして、まだまだご指導を頂け、ご趣味の写真とカメラのお話もこれからたくさん伺えるものとはかり思っております。

先生は、母校・下館一高の教諭を振り出しに、鬼怒商

業高校新設準備職員、同校教頭、県教育庁教職員第二課人事担当管理主事、明野高校校長、鬼怒商業高校校長、そして下館一高校長として、辣腕を揮われ、その間、商業教育の専門家として、本県の商業教育の振興・発展に大きな足跡を残される一方で、茨城県高等学校野球連盟会長としても、茨城県高等学校教育研究会進路指導部長としても、多大な功績を残されました。

先生はご勇退の後も、下館市商工会議所の情報化促進副委員長をはじめとして、次城県大規模小売店舗地域審査会委員、下館市社会福祉協議会運営委員、下館市生涯学習指導員などの要職を歴任され、産業教育の発展に、青少年の健全育成に寄与され、更には、シニアライオンズクラブ会長、ライオンズクラブ国際協会キャビネット事務局長などを歴任されて、社会奉仕活動の取りまとめ

役として、献身的に幅広く活躍されました。奥様をはじめとするご遺族のご悲嘆は、察するに余りあり、胸の張り裂ける思いでございます。ご遺族には慰めの言葉もございませんが、これからのご遺族をどうぞ天国から末永くお守りください。

恩師 関根利康

紫西同窓会長を偲ぶ 吉田公哉(四十二回卒)



ますようお願い申し上げます。関根先生、私達は、先生のお教えの一つ一つを胸に、これからは心新たに頑張ってみます。先生の温かく穏やかな眼差しと遺影に最後のお別れを申し上げ、心からご冥福をお祈り申し上げます。

平成年六月二十八日、関根先生の御家族より「入院中の先生の体調が急変し、今日あたりが山ですと、担当医の先生に言われました」と電話があり、家内共々、病院に急行致しましたが、面会できる状態ではなく、病院の待合室にて、元気に回復される事を祈りつつ退室致しました。後日御家族から小生が帰ってから二時間後に永眠されたとお聞き致しましたが、正に

断腸の思い、言葉もありませんでした。思えば、先生の御指導は下館一高在学中は元より、社会人になってからも、折に触れ教えてくれたこと数知れず、正に我が師の恩でありました。先生の教育者としての信条は紫西会報第三七号の中にも記してありましたが、「民主的、文化的、平和国家建設を旨とした国民教育こそが、我が国に繁栄をもたらす」と言うものでした。また、先生が藤原正彦先生の「国家の品格」を読み、「人類が誇れる文化を生んだ日本」と言う講演を聞き私に話をされた

「君達も卒業して何年か何十年か後に、クラス会や同窓会が行われる事でしょう。その時は非出席出来る様な人生を送って下さい。」と言われました。今その言葉を思い出す時、なんと奥の深い言葉だと思ふ事しきりです。

教育には、不易な部分がある。教育に於いては、英語を小学校段階から教える等より、自国の歴史や文化、自分の母国語である美しい日本語をシッカリ勉強させる。そして数学教育の基本をしっかりと教える。教育が成功すれば母体である国の底力が強まり、より良い教育を行った国が生き残る！そんな事を熱く語っておられました。私は四十二回卒業生です、卒業してから本年で四十二年がたちましたが、卒業前にした関根先生の最後の授業を昨日のごとく覚えております。

先生はその時言われました。君達も卒業して何年か何十年か後に、クラス会や同窓会が行われる事でしょう。その時は非出席出来る様な人生を送って下さい。」と言われました。今その言葉を思い出す時、なんと奥の深い言葉だと思ふ事しきりです。

さて小生の事を少し話を致します。昨年五月六十才を迎え、東京に出て参りました。週の大半を都内で過し週末に帰る生活です。定年になり故郷に帰る人は多いでしょうが小生はまだ何か出来るかと自問自答した末に上京致しました。幸い友人達のお蔭で各企業の顧問として楽しく頑張っております。気力・体力共すこぶる長く、今が一番元氣と家内と話をしてお

ります。

週末にもどる筑西市では
母校の隣を流れる五行川にこ
こ数年サケが上り、カモが
数十羽、遊んでいます。冬

晴れの土手を散歩しながら
関根先生を思い出しておりま
す。

平成二十年一月十四日
台章

新同窓会長に

中山喜一郎氏

(三十一回卒)

岩瀬支部長

江尻 松男氏

水戸支部長

大和田 實氏

協和支部長

高濱 慶弘氏

関東銀行支部長

桜井 隆氏

常陽銀行支部長

黒崎 邦雄氏

富士通支部長

松村 悦裕氏

教友会会長

高橋 好文氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 関

正樹氏

副会長 吉田

公哉氏

副会長 黒崎

邦雄氏

副会長 稲見

庄二氏

副会長 黒崎</

報 西 会 報

私は学業成績も非常に優秀で(本当はちょっと卒業できたのですが)、学校より「指示があるまでしばらく登校しなくてよろしい」と何度とも言われました。「一番辛かったのは、「登校は許可するが勉強は図書室で図書の先生の前でやるように」とという指示でした。これは大変でした。サボれないのです。

また、下館一高に入学時、何でも良いから一番で卒業したかったので卒業式終了と同時に「いの一」で校門を飛び出しました。変な一番ですが一番は一番です。このように馬鹿な一番を考えつく変な奴は他に居ないだろうと、一人悦に入っていた記憶もざいいます。

さて、それでは私の生い立ちについて記してまいりたいと思います。

名前の八千万(やじま)は、両親が私の生まれた一九四七年当時の日本の人口に因んでつけたそうです。当時は戦後の食糧難の時代で、約八千万人の人達が食うや食わずの状態だったそうで、その八千万人の人達を食べさせることのできる男に育って欲しい、との願いで命名されたそうです。

小学生の頃は、横綱か総理大臣か社長になろうと決心していました。しかし、中学生で身長がストップしたため横綱は目指せず、総理大臣も難しくそうであると思い、社長の道が残りました。そこで自分なりに美容師、デザイナー、料理人の三つに絞りましたが、美容師は柄ではない、デザイナーになるには絵が上手くない、結論は料理人になることでした。

い、との願いで命名されたそうです。

小学生の頃は、横綱か総理大臣か社長になろうと決心していました。しかし、中学生で身長がストップしたため横綱は目指せず、総理大臣も難しくそうであると思い、社長の道が残りました。そこで自分なりに美容師、デザイナー、料理人の三つに絞りましたが、美容師は柄ではない、デザイナーになるには絵が上手くない、結論は料理人になることでした。

まず、五年間は「いい腕」と言われる料理人になるための完全な修行期間、次の三年間は経営を学び、二十六年の誕生日に社長として店を持つというビジョンを描いていました。三年遅れの二十九歳の誕生日にその夢を叶えることができました。

二十九歳までの足跡は、高校卒業後、父親から買った二万円を持ち上京、地下鉄銀座線田原町駅で拾ったスポーツニッポンの求人欄で見つけた洋食屋の門を叩き、そこで皿洗いや料理の基本までを学びました。父親の言である「どんな道でも、その世界で

一番になれ」の通り、皿洗いは「自分が日本一の皿洗いになるのだ」という気持ちで全力を尽くしました。また、人の嫌がる掃除なども日本一を目指しました。「このように基礎的なことが一番にならなくて、その上の段階で一番になれるわけがない」という気持ちで私の心の中に取りました。

この洋食屋の後に、世界料理オリンピックの個人・団体両部門で金メダルを受賞した洋食界の重鎮、今井克広氏のもとで本格的なフランス料理を学んでいた頃の

一九七九年冬、婚約の挨拶をするために妻の実家のある桐生市の東武線新桐生駅に降り立った時、「俺はここで店を開くと成功する」と閃きました。そしてフランス料理のシェフとしてレストランで働きながら、調理専門学校の講師・料理教室の講師・地方新聞に料理記事の執筆等々をしながら開業の機をうかがっていました。

初めて持った店は「ジャ&クレーブ」の店「ノザワ」、現在のJR桐生駅から歩いてすぐの場所でした。建坪は十坪、

座席は二十四席で、潰れた喫茶店を中古物件として購入した小さなお店でした。私の専門はフランス料理中心の西洋料理でしたが、お金が無く改装出来ませんでしたので、気軽に来店していただけの「ラーメン屋のような店にしたい」という気持ちで、ピザやクレーブなどを扱う軽食屋にしました。この店で妻と二人で、早朝から深夜まで忙しく切り盛りしながら、経営に関する本、社長とタイトルにある本を手当たり次第に読み漁りました。

一九八二年四月、外食産業の先進地アメリカに視察に行った際、郊外の繁栄を見て日本もいずれこうなるであろうと思い、翌年八月、三十六歳の時、土地を購入し店を新築し一億七千万円の設備投資をし、敷地面積三百三十五坪、建坪六十七・五坪の郊外型レストラン「フライングガーデン」の一号店「新桐生店」を開店しました。お蔭様で現在は店舗数七十店舗、パートナー(従業員)数も二千名を超える規模に成長してまいりましたことを大変嬉しく思っております。

結びに、誇り高さ下館一高を卒業し四十二年の歳月が流れ、私も還暦を迎えました。が、またり歳に戻った六十歳の少年は、これからの夢と未来を語れる若々しい熟年を目指します。これからは、心が喪失されつつある現代に、世のため人のために尽くせる人間を目指し、人の喜びを自分の喜びとできるように「心・気持ち」を大切にしたい。

紫西同窓会水戸支部の同窓会は、格別な事出のない限り、毎年十一月に開催する重要な行事となっております。昨年も十一月九日、市内の「ホテルビュー水戸」で開催しました。

当日の出席者は四十七名で例年の比較では十名程下回りましたが、雰囲気は例年に劣らず盛況でした。参考まで昨年からこれまで最も出席者の多かったのは、平成七年の同窓会でした。手持ちの資料によると在職・退職会員共に合わせて九十二名出席とい

人生を送りたいと思っております。また、ご面倒をおかけしました当時の先生方のご指導には、心から感謝申し上げます。

「ありがとうございます」

感謝

紫西水戸支部同窓会開催

前紫西同窓会水戸支部長 直井 廣 治(四十二回卒)



う記録があります。この同窓会時には新幹事として司会を務めましたので、特に鮮明な記憶として残っております。特別な記念行事として開催された同窓会でないにも拘わらず、百名近い出席者があったことに一種の驚きと名状し難い感情の高ぶりを感じたことが今なお脳裏に残る記憶の要因になっているものと思われれます。

十年ほど前からと記憶しておりますが、当支部同窓会には、下館一高校長、紫西同窓会長(両名のご臨席を頂い



て参りましたので、今回もその例に倣い竹井茂雄校長、紫西同窓会から稲見庄二副会長（稲見副会長には以前下館一高校長在任時にご臨席頂いた経緯があり、今回は会長のご都合による欠席のためその代理として。）にご臨席頂き、各々懇篤なご挨拶を頂戴いたしました。特に竹井校長先生のご挨拶の中で、

一高の学習の現況や進学の概要などの興味深いご説明を拜聴して、一九四四年という戦争中に下館商業学校に在校していた私はずもより、同時代の会員方も私同様に現在の下館第一高等学校の学習内容や進学の現状など往時を比較して正に隔世の感があり、感慨の深さ一人なるとのことがあったことと思いま

す。ご両所のご臨席により同窓会に華を添えて頂き、和やかなムードをより一層高揚させて頂きましたことに改めて感謝の意を表する次第であります。なお、会員の席次は従来どおり概ね卒業年次ごとに設けましたので、クラスメートの小グループ並みの親睦感を味わえたかと思えます。

年一回のこの同窓会が、下館一高卒業の同窓生として、

青春満喫

高校時代は人生の宝だ！

いくつになっても高校時代の思い出は色あせないような気がします。大きな可能性を信じて、夢に向かって勉強し、友人と馬鹿をやりながら友情を深め、学校行事に夢中になり、クラスマッチで汗や涙を流したことがつい昨日のように思い出されます。

今年も生徒達は七曜祭にクラスマッチに野球応援に青春を謳歌しました。時代の流れとともに一高生も変わってきたような気もしますが、一高生の行事に取り組むバイタリティーは今も昔も健在です。

又同期生としての親睦を深め、現在の心境やら、職に対する感想などの交換の場としての有意義さを印象づける同窓会となれば誠に幸いであり、そうなることを心から願っております。

最後に紫西同窓会と下館第一高等学校の益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

平成二十年一月二十四日記

同窓生のみなさん、たまに学校を訪れてはいかがですか。そして在りし日の青春のニコマを思い出してみませんか。

